# 第２章　農学部遺跡ＢＥ33の発掘調査

## １　調査の方法

調査対象地域は京都市左京区北白川追分町所在の農学部農林生物科等研究室実験室新営建物予定地（以下建物予定地と略す）と　建物に伴う排水管埋設予定地，ＲＩ貯留槽新設予定地約880m²である(図版53)。昭和49年の掘調査（中村49ｂ・50）の時，旧農学部本館が残っていたために，調査を行なえなかった地域である。したがって今回の調査地域は各所に分散する結果となった。それぞれの発掘区にアルファベットと数字を付し，Ａ～Ｅ区・Ｍ１～Ｍ４区（図版54）と呼ぶことにした。遺跡の表示は過去の調査との関係を示すため，京大植物園遺跡の調査以降使用している真北を基準線とする方眼グリットを使用した。調査範囲は東西Ｚ～$J^1$ラインと南北16～23ラインに囲まれた地域である。また教養部遺跡や病院内遺跡との相関関係を正確に記録するために，方眼グリッドを構内座標に読みなおす作業を行なった。$A^1$—16は〔Ｘ＝2112.283　Ｙ＝2689.562〕で$C^1$—18は〔Ｘ＝2132.283　Ｙ＝2669.562〕である。(1)

建物予定地は旧農学部本館のコンクリートの基礎が深さ約1.5ｍまで残っていたので，土層観察用の畔は，前回の調査の時中央に設けた19ラインの畔の延長以外は省略した。

層序を確めるためにＢ，Ｃ１，Ｃ２区にそれぞれテストピットを掘り，その上で表土層と耕土層の一部と現代の攪乱とを機械で掘削・排除した（図版1-2)。耕土層以下黄砂までを分層発掘し，黄砂層については一部を機械で掘削した。さらに地山の白砂層または礫層までを発掘して調査を終了した。発掘期間と広さの関係で，Ｅ区では地山を確認できなかった。またＤ区は石と瓦の詰ったピットを検出したので，調査範囲を東西に拡張した。しかし排水管の位置を変更する事に決まったため　拡張部分は遺構の範囲を確認しただけで発掘を中止した。発掘部分については一部年代のわかる遺物を取上げ，黄砂を入れて埋め戻し保存処置をこうじた。（吉野）

## ２　遺跡

**層　　位**　調査対象地域は旧地形の台地と低地の各所に分散しているため　各区の層の対応が困難であった。したがって本書では各区ごとに上から順に数字で層を表示し，内容を記述することにした。ほかの地区の層との対応はおおよその年代を述べることによっ

て示したが，確定的なものではない。

A区　地表から4mまで発掘し12層に分層できた(図版2-1)。第1層は表土であり第3層がこれに続く。第3層は茶褐色砂質土で，主として13～15世紀の遺物を包含する。第3層の上面で淡茶褐色土のピット（第2層）を検出した。出土遺物は第3層と大差ない。第4層は暗褐色砂質土で，主として11世紀後半～12世紀の遺物を包含する。第5層は黒色砂質土で，5世紀末～11世紀前半（主として8世紀）の遺物を包含する。第1層から第5層まではほとんど水平に堆積している。第6層は黄砂で，A区東端で現はれ西へ行くにしたがって除々に下がりながら厚くなり，最も厚いところで1mである。この層の上面はA区全域でほぼ水平であり，第5層堆積の前に削平された可能性がある。第6層上面の標高は63.0mである。第7層から第9層までは縄文時代の遺物を包含する。第7層は黒褐色土第8層は茶褐色土，第9層は灰褐色砂質土である。第7層と第8層とはA区東半では地山の傾斜に沿って東から西へ下がるが，西半ではほぼ水平に堆積する。第9層はA区中央にレンズ状に堆積する。第10層以下は地山である。第10層は白砂，第11層は黒色土，第12層は礫を含むやや粗い白砂である。第12層はA区東端で土堤状の高まりをみせ,ここから東及び西に向って急に下がる。最も高いところで標高62.5m,最も低いところで61.0mである。

B・C1・2区　地表から4mまで発掘し20層に分層できた（図版2-2，3-1･2，55，56)。第1層は表土，第2層は青灰色粘質土で耕土，第3層と第4層はそれぞれ灰褐色土及び茶褐色土で床土と考えられる。第3層はC1区には無い。第4層は19ライン付近で段差があり，ここに棚田の境界があったものと推定できる。第3層と第4層とは主として16世紀以降の遺物を包含する。第4層から第6層にかけては一連の漸移層であるが，第5層と第6層とは第4層にくらべやや色が赤く，出土遺物も13～15世紀のものを主とする。第5層は18ラインの南約14mで消える。第6層を除去した段階で第8層上面に東西溝（第7層）を検出した。第7層は灰褐色砂質土，第8層は暗褐色土で，いずれも11世紀後半～13世紀の遺物を包含する。第5，6，8層はC1区北半では見られない。これはC1区北半が台地をなしているので第4層堆積前に削平を受けたからと考える。第9層は第12層の凹地に部分的に堆積した土で，黄砂を混じえた黒褐色土である。やはりC1区北半には無い。第9層を除去した段階で第12層上面に無数の不定形ピット群（第10層）を検出した。第10層は黄砂や黄褐色の粘土ブロックを混じえた暗褐色土で，掘りかえした土が再び埋まったような堆積を示す。第9層と第10層とはやはり11世紀後半～12世紀の遺物を主として包含する。第11層は灰色混黒色土で，7世紀～11世紀前半の遺物を包含する。C1区にだけ存在

し　19ライン以南に見られないのは，おそらく不定形ピット群と関係のある削平を受けているからと考える。この削平は自然の地形に沿ったものである。第12層の黄砂はＣ１区では19ラインの北で現はれ南へ除々に下がって厚くなるが，東西溝の南からＣ２区にかけて薄くなり，Ｃ２区東南端で再び厚くなってわずかに上がる。これは第12層が第11層と同時に削平を受けているためと考える。第12層上面の標高はＣ１区の最も高いところで63.5m，Ｃ２区中央で62.5m，Ｃ２区東南端で63.2mである。

第12層と第13層との境界付近で弥生時代前期末の土器片が出土しており，第12層は前１世紀以降に堆積したものと推定することができる。第13層はＣ１区では黒色の砂質土で南へ向かって下がるが，19ライン付近以南では水平に推積する黒褐色粘土の薄い層に変る。第13層は縄文時代晩期の遺物を含む。第14層と第15層は19ライン付近であらわれＣ２区に薄く水平に堆積するが，18ライン以南でわずかに厚みを増す。第16層はＣ１区北半では暗褐色砂質土であるが，Ｃ１区南半で淡褐色粘土に変り，南へ下がるにつれて厚みを増す。しかし19ライン以南では水平堆積となり厚さも一定になる。第14層から第16層までは縄文時代中期～後期の遺物を包含する。第17層以下は地山で，第17層は白砂，第18層は黒色土，第19層は礫層，第20層はやや粗い白砂である。第19層はＢ区西端とＣ１区との２ケ所で検出した。地山はＣ１区からＣ２区にかけて大きく下がったのち，Ｃ２区からＢ区にかけてほぼ水平になり，$C^1$ライン付近で土堤状の高まりを見せここより西では再び下がる。この土堤状の地形は18ライン，19ライン，Ａ区北壁の３ケ所で確認しており　地表には現われない南北方向の自然堤防であると推測している（図版56)。第12層から第16層まではこの自然堤防の所で薄くなるか，もしくは部分的に消える。地山上面の標高はＣ１区の最も高いところで63.0m，Ｃ２区中央で61.2m，自然堤防の上で62.3m，$C^1$ライン以西の最も低いところで61.7mである。Ｃ２区では以上の層位のほかに第12層上面で検出した井戸と，第16層上面で検出した縄文時代土壙とがあるが，これについては遺構の記述の際に述べる。また昭和49年度調査地域とＢ区及びＣ２区との層位は図版56で示すようにきわめてよく対応する。

Ｄ区　　地表から2.5mまで発掘し８層に分層できた。第１層は表土，第２層は青灰色の耕土，第３層は灰褐色の床土である。第４層から第６層までは主として14～15世紀の遺物を包含する。第４層は茶褐色土でほぼ水平に堆積している。第４層を除去した段階で第５層上面に淡茶褐色土のピットを検出した。ピットからの出土遺物は少ないが時期的には第４層と大差ないと考える。第５層は暗褐色土で，Ｄ区南端から北へ向かってわずかに上

がり薄くなる。第５層を除去した段階で第６　７，８層を検出した。第６層は集石ピットで，径10～50cmの河原石を主とし，ほかに瓦や土器片が混じっている。第７層は黒色土で縄文土器や石棒が出土し，縄文時代中期の遺物包含層もしくはピットである。後世の削平や攪乱を受けていて，Ｄ区中央にわずかに見られる程度である。第８層は白色細砂であるが，地山であるかどうかは確認していない。

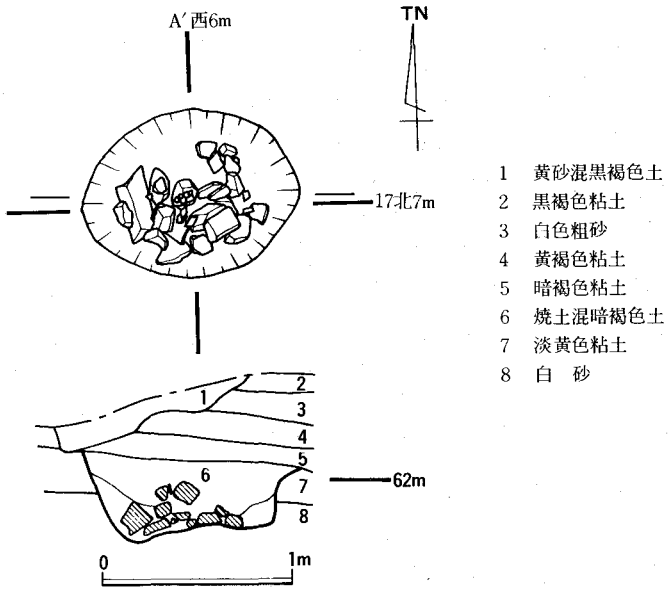
Ｅ区　地表から2.0ｍまで発掘し８層に分層できた。第１層は表土，第２層は青灰色砂質土で耕土と考えられる。第３層は淡茶褐色土で床土と考えられる。以下第４層茶褐色土，第５層灰褐色土，第６層白砂混黒褐色土，第７層白砂混暗褐色土，第８層黒色土と続く。第３層から第４層にかけて14～15世紀のものと考えられる瓦器の羽釜がまとまって大量に出土した。しかし第３層から第５層までは漸移的な変化であるため明確な生活面を検出することはできなかった。第８層からは縄文時代の遺物が少量出土する。第８層の下は黄色砂であるが，地山にあたるものかどうかは確認していない。

Ｍ１～４区　Ｍ１区は全面的に現代の攪乱を受けていて包含層は検出できなかった。Ｍ２区では地表から1.2ｍまで発掘し３層に分層できた。表土の下はすぐに黒褐色土がありこの層からは８世紀中頃の遺物が出土するが，現代の攪乱を受けている可能性が強い。黒褐色土の下は白砂であるが，地山であるかどうかはわからない。Ｍ３区でも地表下1.4ｍまで発掘し４層に分層できた。表土，黒褐色土，黒色土，白砂である。黒褐色は８世紀中頃の遺物を主に包含し，黒色土は縄文時代中期の遺物を包含する。白砂は地山と考えられる。白砂上面の標高は62.8ｍである。Ｍ４区では地表下1.5ｍまで発掘し４層に分層できた。表土の下は淡茶褐色砂質土で13～15世紀の遺物を包含する。以下暗褐色砂質土，黒色土と続く。暗褐色砂質土は12～13世紀の，黒色土は11世紀前半～12世紀の遺物を包含する。（吉野）

**遺　構**　今回の調査で検出した主要な遺構はＣ１区東西溝，Ｂ・Ｃ１・Ｃ２区の不定形ピット群，Ｃ２区の縄文時代土壙および井戸，Ｄ区の集石ピットである。

縄文時代土壙　Ｃ２区のC¹西６ｍラインと17北７ｍラインとの交点付近で第16層（淡黄色粘土）上面において土壙を検出した（第１図，図版４）。土壙は径1.2×1.0ｍ深さ約50cmの楕円形である。中に径10～50cmの河原石を配置している。最下段に径10cm前後の石を敷き，二段目に径20～30cmの石を50×70cmの長方形に積んでいる。二段目の石の上で口縁部を南に，内面を上にして縄文土器が出土した（ＡＪ33）。石積はもっとも重なったところで四段を数えるが，三段目から上の石はまばらで土器片の上に崩れおちたような状態に

なっている。この遺跡がつくられた当初は第16層上面より高く石が積まれていたが，なんらかの形で上部が破壊された結果であると考える。土壙内の土は第15層（暗褐色粘土）とよく似ているが焼土が混っていて炭化物が多い。土遺物は晩期末の甕（ＡＪ29・30・33）だけである。




不定形ピット群　　Ｂ，Ｃ１，Ｃ２区の第12層（黄砂）上面で検出した（図版５，57）。ピットの径はだいたい0.5～2.5mであり，径１ｍ前後のものが多い。これらのピットが10数個集って一群を形成し，全体で７群ある。各群のピットは規則性が認められない状態で相互に重なりあっている。単独で掘りこんだピットもあるが径の小さいものを除き．ピット群と同じ性格のものと考えられる。埋土は黄砂や黄褐色粘土のブロックを混じえた暗褐色土で，掘上げた土が再び埋ったような土である（図版3-3。）地山の白砂層を深く掘りこんでいるものはなく，ほとんどのピットは第13層～第16層の粘土を掘り貫くか，もしくはその直前で掘るのをやめていることから，この遺構は粘土採取跡と推定することができる。出土遺物は土師器（ＡＨ07），須恵器（ＡＣ02），緑釉陶器（ＡＧ10），磁器（ＡＰ08）瓦（ＡＴ08・11）など11世紀後半～13世紀のものを主とするが，縄文時代の石錘（ＡＳ04）も出土した。

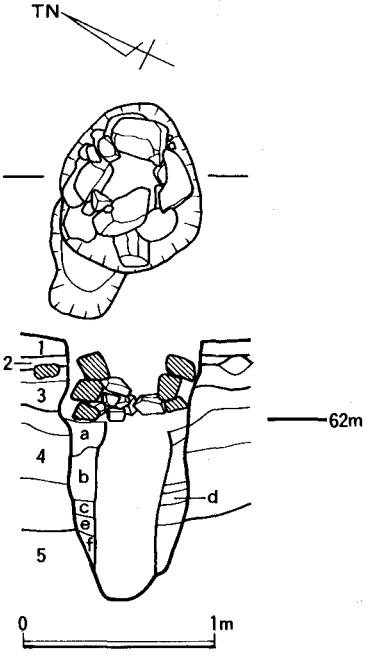
井戸　　Ｃ２区のB¹ラインと18ラインの交点付近において第12層（黄砂）上面から小規模な井戸が出土した（第２図，図版6-1･2 。）この井戸は径約30cmの円形で深さは1.4ｍである。掘形は径60cm深さ1.4ｍで、黄砂上面から第13層以下の粘土層を貫き地山の白砂に達している。井戸内の埋土を石組下まで発掘したのち，井戸の構造を調べるため立割って断面を調査した。図版6-2で観察できるように，まず掘形を掘り，推測ではあるが筒形の木製品を中央に置き，掘形との隙間に砂と粘土を交互に詰めてから，15～30cmの河原石を積ん

で井戸を作っている。出土遺物はないが検出面から推して,11世紀後半から12世紀に比定できる。

東西溝　　Ｃ１区19ライン付近の第８層（暗褐色土）上面において検出した（図版57)。幅1.0～1.5m深さ60cmで　方向はほぼＥ８度Ｓであり，西から東へゆるやかに下がる。この溝は第11層（灰色混黒色土）および第12層（黄砂）が削平されて生じた台地部の裾に沿って走る。図版55で見られるように不定形ピットが埋ったのちに溝を作り，この溝を２時期にわたって使用していることがわかる。最終的には第８層を溝の肩としていることから11世紀以降13世紀まで使用されたといえる。溝の性格は埋土に砂が多いことから　低地部の排水溝としての役割が考えられる。出土遺物は土師器，瓦器（ＡＺ07)，須恵器，緑釉陶器，瓦で11世紀後半～13世紀のものが主である。

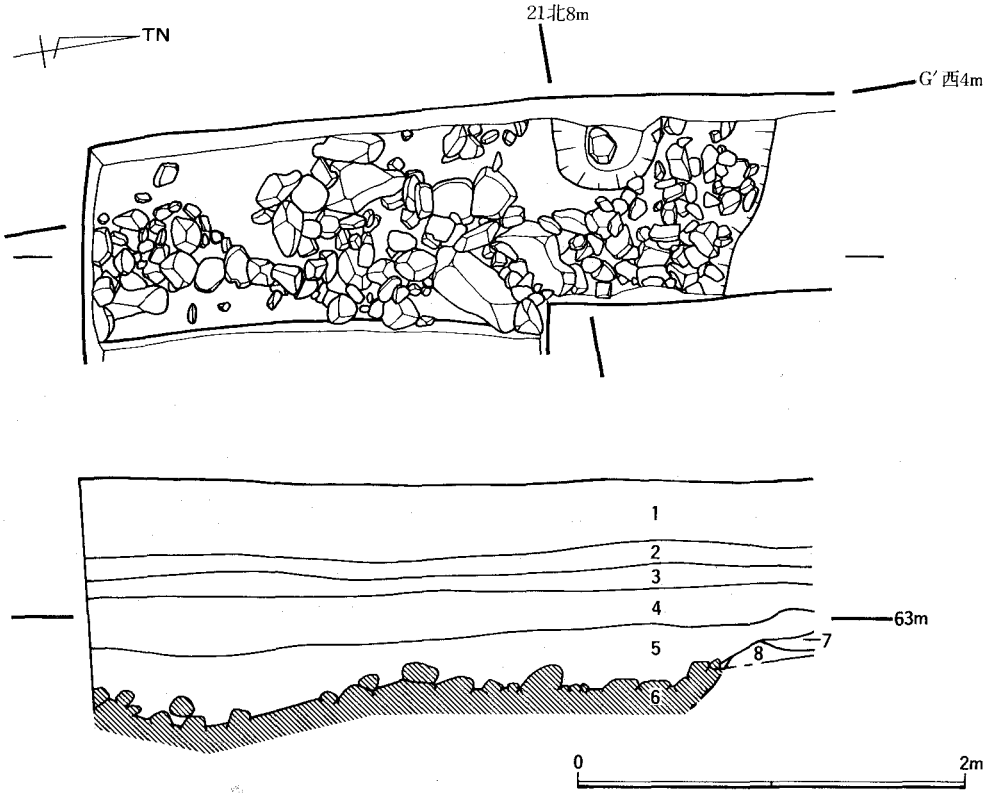
集石ピット　　Ｄ区南半部の第７層上面において検出した（第３図，図版6-3･4)。遺構の平面的な広がりや深さは確認していないが，少なくとも西側に続き，平面形は円形を呈するであろう。ピットの中には径10～50cmの河原石が無秩序に投げこまれている。性格は不明であるが第５層が堆積する前に不要な石を一ケ所にまとめて捨てたものであろう。出土遺物は土師器，瓦器，ＡＴ30と同笵の瓦などであり，時期は14～15世紀である。

以上に記したおもな遺構のほかに，Ａ区，Ｃ１区，Ｄ区出土の小ピットとＣ１区出土の石列がある。Ａ区では第３層（茶褐色砂質土）上面からピットが５個出土した。そのうち全体の形のわかるものは２個で，いずれも長径約 1.0m深ち約50cmの楕円形である。出土遺物は土師器，瓦器，須恵器　瓦（ＡＴ15・32・35）で瓦が最も多い。時期は13～15世紀であろう。ピットの性格は不明である。Ｃ１区では第12層（黄砂）上面から出土した。ピットは径0.5～200m深さ約30cmで，磨製石斧（ＡＳ12）や瓦器の皿（ＡＺ04）などが出土している。性格は不明である。Ｃ１区では第４層




1　黒褐色粘土
2　黄褐色粘土
3　暗褐色粘土
4　淡黄色粘土
5　白　砂
a　黄色・暗褐色粘土
b　白 色 砂
c　黄色粘土
d　白 色 砂
e　黄色粘土
f　灰 色 砂

（茶褐色土）上面から石列が出土した。石列は第４層の段状の斜面に沿って６ケ所認められた。径10～30cmの河原石を約1.5ｍ間隔に立て並べたもので,棚田の境界を示すためのものであろう。Ｄ区では第５層（暗褐色土）上面からピットが４個出土した。ピットはすべて径30～60cm深さ30～40cmの円形ピットである。１個は柱穴と考えられ，ほかのピットの性格は不明である。（吉野）




## 3　遺物

Ａ，Ｂ，Ｃ１，Ｃ２区は層位が黄砂層をはさむ上下２層に区分される。上層から土師器，黒色土器，瓦器，須恵器，陶磁器，瓦，石製品，銭貨が出土し下層から縄文土器，弥生土器，石器が出土した。縄文時代の遺物は上層からも小量出土した。Ｃ，Ｅ区では第１～第７層から土師器，瓦器，須恵器，陶磁器，瓦が出土し第８層から縄文土器，石器が出土し

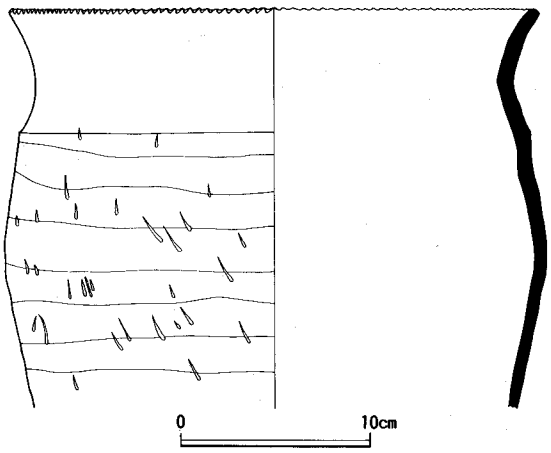
た。これらのなかでほぼ一括の資料と考えうるものとしてＣ２区縄文時代土壙，Ｅ区第３層出土の瓦器などがあるが多くは包含層から出土した小片である。目下整理中のため抽出資料の概略を述べることにする。遺物の出土層位や図版の位置は巻末の第６表を参照されたい。

**縄文土器**　前期の土器はＡＪ01・02の２片だけである。ＡＪ01は二枚貝による内外条痕を施す深鉢の胴部である。器壁の厚さは約３㎜。北白川小倉町遺跡〔梅原35〕には類例がない。ＡＪ02は端部がやや肥厚する波状口縁をもち，３本撚りの縄文を施す土器で，北白川下層Ⅲ式である。

ＡＪ03は船元Ⅳ式，ＡＪ04～06は里木Ⅱ式である。ただしＡＪ05・06は器壁が５㎜弱と薄く，かつ内面に丁寧なナデを施している点で，瀬戸内地方の土器と異なる。

ＡＪ07～20は加曽利Ｅ式に系統をたどることができる土器である。ＡＪ07～14は隆帯や屈曲によって細長い胴部と口縁部とを区分する深鉢である。ＡＪ07は主文様部[(2)]を隆帯で区画し，中に渦文を配置する。口縁端部は肥厚し，内側に面をもつ。ＡＪ08は口縁部に蛇行沈線文を描き，縄文を縦位に施す土器。ＡＪ09は主文様部が橋状把手で，その上にＳ字状押引き沈線文を施す。主文様部の脇に隆帯と押引き沈線文で楕円形区画文を描き，区画内に綾杉沈線文を施す。ＡＪ10は楕円形沈線区画内に綾杉沈線文を施す土器で口縁端部は肥厚し内側に面をもつ。ＡＪ11は口縁部を隆帯で区分して，沈線内刺突と刺突文を施す土器。ＡＪ12は口縁部を隆帯で区分し，隆帯上に指頭圧痕を施す。ＡＪ13はこの種の土器に一般的な垂下沈線文を施した胴部である。ＡＪ14は主文様の下に橋状把手がつくほかの深鉢と異なった文様構成の土器。指頭圧痕，竹管刺突，押引き沈線で文様を施している。

ＡＪ15・17は波状口縁の鉢。ＡＪ15は口頸部に退化した渦文と孤状文を施す。ＡＪ17は口縁部に平行沈線，頸部に渦文と弧状文を施す。




**第４図**　縄文時代土壙出土土器

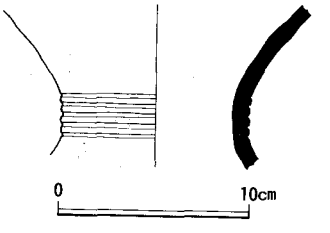
ＡＪ16・18は「く字状」に内折する山形口縁の鉢。ＡＪ18は口縁部に長方形の区画文，山形頂部の下に渦文，その両脇に楕円形区画文と刺突文をもつ円形区画文を施す。昭和49年の農学部構内遺跡調査の出土土器〔中村74ａ－図版Ⅰ〕と接合した。ＡＪ20はキャリパーの深鉢で，口縁端部は内側に面をもつ。多条の孤状沈線文で口縁部と胴部とを区分する土器で，星田式と類似する。

ＡＪ19は口縁部に退化した渦文と２段の横長の方形区画文を押引き沈線で施す土器。口縁端部は内側に面をもち，胴部をよく研磨した浅鉢である。図版36に図示した中期末の縄文の撚りはＡＪ15のＲＬ１例を除いてすべてＬＲである。

ＡＪ21～27は後期の土器である。ＡＪ21は曲線的な磨消縄文をもつ壺形に近い中津式の鉢。ＡＪ22は帯状の磨消縄文と沈線内刺突をもつ鉢。器面の研磨は良好で，ＡＪ21より時期が下るものであろう。ＡＪ23～27は昭和48年植物園遺跡出土の後期前葉の土器群とほぼ同じものである〔中村74ｂ－10～13〕。ＡＪ23は１本の粘土紐で作る幅の狭い口縁部をもつ土器で，粘土紐の接合部から剥がれている。ＡＪ24は渦文と１条の沈線文を口縁部に施す深鉢。口縁部は肥厚しない。ＡＪ25はやや内彎した口縁部に，横に開く孤状沈線を施す土器。ＡＪ26は丸底になる小型の鉢で口縁端部と胴部に無節の縄文を施す。ＡＪ27は内外とも研磨の著しい赤褐色の鉢である。

ＡＪ28～32は晩期末の突帯文土器である。ＡＪ28～30はヘラ状工具を斜め横から押捺して施す刻み目凸帯をもつ甕。ＡＪ28・30は磨滅しているため口縁端部の刻み目は確認できない。ＡＪ31は棒状工具を下から扇状に押捺して施す刻み目凸帯をもつ甕。ＡＪ28・29は口縁部が外反し，ＡＪ30～32は内傾する。ＡＪ33（第６図）は胴上部に稜をもち，口縁部が外反する晩期末の甕である。口頸部は丁寧なナデ，稜より下は粗い削りで，胴部では水平な粘土紐の継ぎ目が観察できる。縄文時代土壙から出土したＡＪ29・30・33は滋賀里Ⅳに対応するであろう〔田辺73〕。これらの土器は弥生土器を伴わなかった。（家根）

**弥生土器**　ＡＥ01はＣ１区第13層上面から出土した壺である（第７図）。口縁部は大きく外反し，頸部に５本のヘラ描沈線を施す。外面に磨きを施し，一部にハケ目が残る。内面の調整は磨滅していて判別できない。胎土は明褐色で砂粒を多く含み，焼成はよくない。畿内第Ⅰ様式新段階に相当する。他に刻み目凸帯をもつ壺も出土している。（宇野）



**第５図**　ＣⅠ区出土弥生土器

**石　　器**　石鏃，石錘，石斧，石棒が出土した。

石鏃　石材はサヌカイト。ＡＳ07～09は打製凹基式である。重量は順に1.1ｇ，0.8ｇ，0.9ｇである。両面加工を施す。ＡＳ10は打製平基式である。重量は2.5ｇ。加工が粗雑で未製品の可能性がある。

石錘　ＡＳ01は打欠石錘である。石材はアプライト。重量は40ｇ。ＡＳ02～05は切目石錘である。石材は順に安山岩，ホルンフェルス，スレート，ホルンフェンス。重量は26ｇ，29ｇ，68ｇ，40ｇである。ＡＳ02は切目をつける部分に面取りを行なっている。

石斧　ＡＳ11は小型の磨製定角式である。石材はアルデサイト。基部を欠失する。刃部の片面に使用痕と考えうる破損がある。ＡＳ12は磨製乳棒状である。石材は安山岩。基部と刃部とを欠失する。ＡＳ13は角閃石安山岩を用いた砥石である。

石棒　ＡＳ06は石棒の基部である。残存部の最大径は13.5cm，長さは34.0cm。半面は丁寧に磨き断面が丸いが，残りの半面は加工が粗く稜が残る。大正13年に京都大学陳列館に寄贈された石棒の先端部と同一個体である可能性が強い〔佐原60〕。石材はFelsite（珪長岩），産状はdike（岩脈）である。産地は不明であるが瀬戸内の火山岩ではない。本遺跡からもっとも近くで可能性のあるところとしては丹後半島にある中新統火山岩のうち流紋岩熔岩の噴出口にあたる部分の岩石である。

なお石棒の石材に関しては京都大学理学部助手石坂恭二氏，同理学部大学院生松田高明氏，そのほかの石器の石材に関しては同理学部助教授石田志郎氏から教示を得た。（宇野）

**土師器**　坏[(3)]，皿，高坏，壺，甕，羽釜が出土した。

坏　ＡＨ01～08は胎土が明褐色で焼成が良く，他の土師器と明確に区別できる。Ａ区第９層から多く出土した。ＡＨ01は体部が外反彎曲し，口縁端部を内側に巻き込む。体部内面は横ナデ，外面は横ナデののちにヘラ磨き。底部内面はナデ，外面はヘラ調整。体部内面に一段の放射状暗文，底部内面に螺施状暗文を施す。ＡＨ02･03は体部が内彎し，口縁端部の巻き込みが弱い。体部内外面は横ナデ，底部内面はナデ。底部外面にＡＨ02はヘラ削り，ＡＨ03は指押え。ＡＨ04は口縁端部の内面に一条の凹線を施す。体部内面はナデ，外面はヘラ削り。底部内面はナデ，外面はヘラ削り。底部内面に指押えの凹凸を残す。埦である可能性もある。ＡＨ05は口縁端部が外反する。体部内外面は横ナデ。底部内面はナデ，外面は指押え。体部内面に灯芯の形をした煤が付着し，その部分にそってひび割れが走ることから灯火器として用いたことがわかる。ＡＨ01は天平末（748）年頃に比定される奈良市前川遺跡出土品に，ＡＨ02・03は天平宝字７（763）年に年代の一点をもつ平城宮跡ＳＫ219出土品に類例があ

る〔吉田74－27～23・ＰＬ20と24，奈文研62－63～68・ＰＬ45〕。

皿　ＡＨ06～16は胎土が明褐色または淡褐色で焼成は良くない。口縁部と体部の内外面は横ナデ。底部内面はナデ，外面は指押え。器壁が厚い。口径が15cm前後のものと，10cm前後のものに大別できる。ＡＨ06・07・10は口縁部に二段の横ナデを施し，端部が内彎する。ＡＨ08・09・11は口縁部に二段の横ナデを施すが，端部が外反する。ＡＨ12～ＡＨ16は口縁部に一段の横ナデを施す。端部が内彎するものと外彎するものがある。口縁部に二段の横ナデを施し端部を外反させる手法は平安京左京四条一坊井戸ＳＥ－８出土品にある〔平安京調査会75－図版58〕。ＡＨ12～16はＣ１・Ｃ２区第８～第５層から多く出土したが正確な年代を与えることはできない。

ＡＨ17～22は口縁部が横ナデによって外反し，端部は内側に肥厚する。体部と底部の内面はナデ，外面は指押え。器壁は薄い。胎土は明褐色・淡褐色のものが多く，焼成は良くない。ＡＨ17は口縁部の外反が弱く，端部を内側に巻き込む。この一群の土器中ではもっとも焼成が良い。ＡＨ18～20は口縁部の外反が強い。体部外面に指押えの凹凸が顕著に残る。ＡＨ18は口縁端部をつまみ出し，ＡＨ19は折り返し，ＡＨ20は内側に巻き込む。ＡＨ21・22は，ＡＨ17～20より作りが粗雑で器壁が厚い。ＡＨ21は口縁端部を内側に巻き込みＡＨ22はつまみ出す。口径は10cm前後である。ＡＨ17は９世紀に比定される平城宮ＳＤ650出土品に類例がある〔奈良研74－ＰＬ66〕。ＡＨ18～20は平安京左京四条一坊Ｉ号トレンチ第Ⅲ層出土品に類例があり，ＡＨ17に続く時期のものである〔平安京調査会75－図版55〕。ＡＨ21・22は平安京左京四条一坊ＳＥ－８出土品に類例があり，平安時代後期に下るものである〔平安京調査会75－図版58〕。

ＡＨ23～25は口縁部に一段の横ナデを施し，端部に面取りを行なう。胎土は淡褐色で焼成は比較的良いが，灰白色で焼成が悪いものもある。ＡＨ24は口縁端部に凹線を施す。ＡＨ25は底部が薄く口縁部が厚くなり外反する。ＡＨ23は平安京左京四条一坊ＳＥ－４出土品，ＡＨ25は同ＳＤ－13出土品に類例がある〔平安京調査会75－図版63，図版66〕。

ＡＨ26～28は口径が８cm，器高が２cm内外の小型のものである。淡褐色で比較的焼成の良いものと，灰白色または白色で焼成が悪いものがある。体部がやや外反し，口縁部が肥厚するものが多い。口縁部は横ナデ。体部外面は指押え，内面はナデ。ＡＨ28は底部をあげ底につくる。ＡＨ28は平安京左京四条一坊ＳＫ－12出土品に類例があり年代は室町時代以降に下る〔平安京調査会75－図版66〕。ＡＨ29～31は口縁部を折り返した扁平な皿である。ＡＨ29は胎土が明褐色で焼成が良い。ＡＨ30は胎土が淡褐色でＡＨ29より焼成が悪い。折り返した部分に横ナデを施し，二本の稜がつく。ＡＨ31は胎土が灰白色で焼成が悪い。折

り返した部分の内外面に同時に横ナデを施し，一本の稜がつく。

高坏　ＡＨ32・33は胎土が明褐色で焼成が良い。口縁部内外面は横ナデ。体部内面は横ナデ，外面はヘラ削り。口縁端部をＡＨ32は折り返し，ＡＨ33はつまみ出す。器壁が厚く他の皿と異なる特徴があり，高坏の坏部と考える。

ＡＨ34～37は高坏の軸部である。胎土はＡＨ33・34が明褐色で焼成がよく，ＡＨ36・37は灰白色で焼成が悪い。ＡＨ36・37は裾部内外面に横ナベを施し，軸部外面にヘラで面取りを行なう。ＡＨ36は８面の面取りを行なうが，ＡＨ37の面取りは荒い。ＡＨ36・37は円棒状の芯に粘土を巻き付けて軸部を作る。ＡＨ36は軸部に裾部の粘土を貼り付けたのち，軸部と裾部の外面にヘラで粗い面取りを行なう。ＡＨ37は軸部と坏部の境を厚くつくり，横ナデを施す。軸部外面には粗いヘラ削りを施す。

壺　ＡＨ38は丸い体部にやや外反する口縁部がつく。口縁部内外面は横ナデ，体部外面はヘラ削り，体部内面はハケ目。ＡＨ39は半球形の体部に短く外反する口縁部がつく。口縁部の内外面に横ナデを施す。ＡＨ38・39の器形は黒色土器に多いものであり，胎土も黒色土器と同じである。焼成も他の土師器より良い。

鉢　ＡＨ40は体部外面にハケ目，内面に指押え，口縁端部に横ハデを施す。体部内面に煤が付着する。胎土は淡褐色で焼成は良くない。

甕　ＡＨ41は口縁部が外反し，内側に折り返した端部に横ナデを施す。口縁部内外面は横ナデ。体部外面はハケ目の上をナデ，体部内面は調整しない。胎土は淡褐色で砂粒を含み焼成は良い。ＡＨ42は口縁部が外反し，つまみ出した端部に横ナデを施す。体部外面はナデ，体部内面はハケ目。体部内外面に指押えの凹凸を残す。胎土は明褐色で焼成は良い。羽釜（ＡＨ43）は口縁部内外面と端部に横ナデを施す。鍔の上下・端面は横ナデ。体部内面はナデ，外面の調整は磨滅のため不明である。口縁部が短く，端面が口縁部外面と鈍角をなす。胎土は砂粒を多く含み，焼成が良い。

**黒色土器**　埦が少量出土した。ＡＢ03は内面にだけ煤が吸着し，他は内外面に吸着する。ＡＢ01は口縁部がやや外反する。体部内外面にヘラ磨き，内面に渦状暗文を施す。ＡＢ02は体部内外面にヘラ磨きを施すが，外面の調整は粗い。口縁端部内面に１本の凹線，体部内面に渦状暗文を施す。ＡＢ03は体部内面にヘラ磨き，体部外面にナデ。体部外面には１本の凹線を施す。ＡＢ04は底部内面にヘラ磨き，底部内面にナデを施す。断面三角形の高台を貼り付ける。ＡＢ01は９世紀前半に比定される平城宮ＳＤ 650 Ａ様式に類例があり，その他のものはより年代が下る〔奈文研74－ＰＬ70〕。

**瓦　器**　埦，皿，土鍋，羽釜が出土した。

埦　ＡＺ01・02は口縁部と体部内外面に丁寧なヘラ磨きを施す。口縁端部内面には１本の凹線を施す。口縁部は体部と稜をなし外反しながら立ち上がる。ＡＺ02はＡＺ01よりややヘラ磨きが粗い。白石太一郎のいう第一段階に相当する〔白石69－２～３〕。橋本久和のいうＡタイプに近い特徴もあるが，外面のヘラ磨きはより丁寧である〔橋本77－１～17〕。ＡＺ03は体部内面に粗いヘラ磨きを施す。口縁部は横ナデ。口縁部内面の凹線が消失し，口縁部と体部の境の稜は明確ではない。白石の第三段階，橋本のＦタイプに相当する。

皿　ＡＺ04は口縁部に二段の横ナデを施し，端部をやや外反させる。本遺跡から瓦器の皿が出土することは稀である。

土鍋　ＡＺ05は上方がややすぼまる体部に口縁部が直角につき，屈曲して端部は水平になる。ＡＺ06の器形はＡＺ05とほぼ同じであるが，口縁部の屈曲が弱く端面は外傾する。ＡＺ19は耳付き鍋。耳は２個あり，貼付け。横に貫通する孔を持つ。口縁部はかなり内彎してから，やや立つ。外面の口縁から肩の位置まで横ナデを施す。内面は一部にハケ目が残るが全体に丁寧なナデを施している。

羽釜　器形から２類に大別できる。ＡＺ07・08は球形に近い体部と内彎する口縁部を持つ。

ＡＺ09～18は口縁から体部が直線的になるもの。底からやや外開きに立ち上がる。平底である。この類は鍔の端部の形態から細分できる。ＡＺ09・10は鍔の断面が方形に近く端部は明瞭な稜を持つ。ＡＺ11～18は鍔の端部が丸くなる。Ｅ区から一括出土した羽釜はほとんどがこの類である。口径が20cm前後，25cm前後，31cm以上の３種類がある。ＡＺ11～14は大型で，鍔と口縁の間に施した横ナデによる１～３本の凹線がある。ＡＺ11は鍔の下を切り取って竈に再利用したものである。切り取り面と開口部の鍔下面及び内面には焦げ跡がある。ＡＺ14は鍔が剝離し，右上りの粘土紐の継目と体部外面の指押えが顕著な例である。口縁端部は横ナデによる不瞭な凹線を持つものが多いがＡＺ15・18には沈線がある。ＡＺ15は底部外面でハケ目が観察できた。

ＡＺ20は断面円形の三脚がつく口径６．４cmの小型の羽釜である。口縁端部と鍔の間に２本の凹線を施す。

Ｅ区で一括出土した羽釜（ＡＺ12～18）と胴部・底部の形態が類似するものは，平安京一条大路遺跡出土品〔京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会75－第13図〕にある。しかしＥ区出土品は内面にハケ目を残すものが多いという違いがあり，年代的なものか地域的なも

のかは今後検討を要する。なおＥ区ではＡＺ12～18と土鍋（ＡＺ06),耳付き鍋（ＡＺ19),土師器皿（ＡＨ15）が共伴して出土した。

**須恵器**　坏，蓋，埦，高坏，甕，器台，瑞，水瓶，長頸壺，すり鉢が出土している。

瑞　ＡＣ01は黒褐色で外面ににぶい光沢をもち，断面は暗紫色を呈する。胎土はほとんど砂粒を含まず焼成は良好である。明瞭な肩の稜線の下にヘラ描沈線文で画した櫛描波状文帯がある。陶邑古窯址群中のＴＫ23型式（以下陶邑は略す）に比定できる〔田辺66－図版14〕。

坏　３群に大別できる。ＡＣ02～05はたちあがりをもつ坏である。ＡＣ02は淡青灰色でたちあがり端部と受部先端を丸くおさめる。ＴＫ10型式の時期である。ＡＣ03は受部に１条の凹線を施しＴＫ 209 型式に相当する。色は青灰色で底部の２分の１強にヘラ削りを施す。ＡＣ04・05はＴＫ 217 型式に相当する。２例とも小型である。ＡＣ05の受部に凹線があるのはＴＫ 209 型式に類似する。ＡＣ06～15は高台をもつ坏である。ＡＣ06～08は７世紀後半から奈良時代のものである。二種の形態があり，ＡＣ06・07は底部と体部の変り目に稜をもち，やや中心よりに高台がつく。高台は外方にふんばる形態をとる。ＡＣ08の底部と体部の変り目の稜はＡＣ06・07より鋭い。高い高台が体部近くの外方にふんばるようにつく。この２形態はともにＭＴ21窯出土品に類例がある〔大阪府教育委員会71〕。ＡＣ09は灰白色で底部と体部の変り目は明瞭で稜がつく。高台は低く外方にわずかに張る。体部の立上がり直線的と推定され，ＴＫ７型式に比定できる。ＡＣ10～15は平安時代のものである。ＡＣ10～11は底部から体部へ丸みをもって変り，低い高台が体部直下につく。９世紀前半の平城宮 650 Ａ様式土器に類例がある〔奈文研74－ＰＬ68〕。ＡＣ12は体部と底部の変り目の丸みが弱くなる。口縁部をわずかに外反させ端部を丸くおさめる。色は灰黄色で内面に仕上げナデを施す。高台の接地部には横ナデ調整時の凹線を残す。年代は９世紀中頃と考える。ＡＣ13は器壁が非常に薄い。色は青灰色。胎土は精良で底部に粘土紐巻上げの痕を残す。高台はとくに低く，接地部に横ナデ調整時の凹線を残す。９世紀後半のものであろう。ＡＣ14・15は高台部が体部から直線的に立上る。高台の接地面は外端に移る。９世紀後半のものであろう。ＡＣ14・15は高台部が体部から直線的に立上る。高台の接地面は外端に移る。９世紀後半の平城京ＳＤ 650 Ｂ様式土器に類例がある〔奈文研74－ＰＬ75〕。ＡＣ27～31は高台をもたない坏である。体部と底部の変り目に稜をもつものが古いと考えるが，総じて奈良時代から平安時代前期に相当する。ＡＣ32は埦で９世紀後半のＳＤ 650 Ｂ様式土器より年代が下がるであろう。

蓋　ＡＣ16は内面に口縁端部内方にかくれる短いかえりをもち，ＴＫ217型式の中でも新しい要素をもつと考える。その他の蓋については高台をもつ坏と同様２群に大別できる。ＡＣ17～20は７世紀後半から奈良時代に相当する。天井部の中央より外面で斜面をもつものが多く，口縁端部は下方にわずかに屈曲するための上端ににぶい稜をもつ。下端は丸く比較的安定した感じを与える。天井部の調整は充分でなく，内面中央部に仕上げナデを施すものが多い。ＡＣ18は天井部に特徴的な環状つまみをもつ。これらはＭＴ21型式前後の年代に比定できる。ＡＣ20のように天井部が水平に近い弧状を呈するものは，その中でも新しい要素と考えられ，平城宮ＳＫ219様式土器に類例がある〔奈文研62－ＰＬ47〕。ＡＣ21～25は奈良時代末から平安時代前期に相当する。口縁端部近くで下方へ屈曲し，さらに水平に短くのび端部に達する。ＡＣ24は天井部にヘラ削りを施し，ナデは不充分であるが，ＡＣ21のように丁寧にナデを施すものもある。口縁は上端に鋭い稜をつくり，下端部を外方につまみ出す。端部の外面中央には凹線をもつ例が多い。平城宮650Ａ様式土器に類例がある〔奈文研74－ＰＬ68〕。

高坏　ＡＣ32は色が淡青色で胎土は砂粒を含む。筒部と裾部の変り目に２条の凹線がある。長脚二段透し高坏の透し部分が消失した段階のものである。陶邑のＴＫ36－Ｉ号窯出土品に類例がある〔大阪府教育委員会71－図版 6〕。

甕　ＡＣ33は口頸部が外上方に開き，口縁端部を折りまげたのち横ナデを施し鋭い稜がつく。口頸部には上から２条，２条１条のヘラ描沈線を施し，その間を櫛状工具により縦位の平行線で埋める。頸部内面には同心円文がある。陶邑のＫＭ28－１号窯出土品にきわめて類似したものである〔大阪府教育委員会76－ＰＬ68〕。ＡＣ35・36は７世紀から平安時代初期に相当する。ＡＣ35がより古く７世紀後半の可能性がある。

器台　ＡＣ34は裾部に台形の透しが２条の沈線を切るように入る。色調，胎土，焼成，施文などはＡＣ33と全く同じものである。ＫＭ28号窯に類例がある〔大阪府教育委員会 6－ＰＬ67〕。ＡＣ32～34はＴＫ217型式に比定できる。

水瓶　ＡＣ37は糸切底をもちロクロ水びき手法によ　成形する。

長頸瓶　ＡＣ38～40はロクロで引き出した瓶の口頸部である。ＡＣ39は頸部内面下端がふくれ，体部との接合がよくわかる。口縁端部に微妙な相違があるが，３例ともＡＣ37の水瓶と　じく平安時代初頭を中心としたものであろう。

すり鉢　ＡＣ41は外上方にのびる体部と　板　の底部を残す。底部には多数の小孔を穿ち，中央の一孔だけが貫通する。この　種は器形　変　がほとんどないため時期は確定

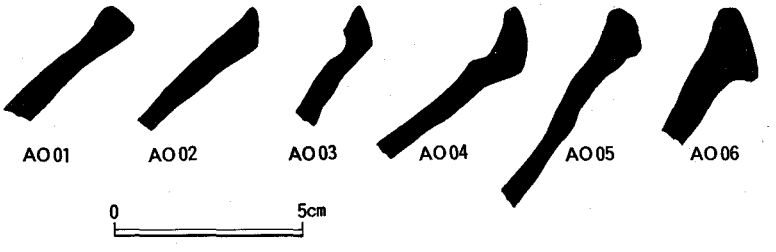
できない。

鉢　ＡＣ 2は平安時代初期から系統をたどれるものであり，平安京左京四条一坊のII号トレンチ暗褐色砂泥出土品に類例がある〔平安京調査会75－図版54〕。年代は平安時代中頃に相当する。(藤原)

**須恵質土器**　須恵器製作技法を受けついだ無釉の土器で，甕と大平鉢の２器種がある。製作地は畿内にあると考えている。大平鉢は一　的に次の特徴をもつ。①重ね焼きのため口縁部に黒っぽい光沢をもつ。②内外面に横ナデを施すので，器壁の厚薄が生じる。③平底で，ＨＯ03・05・07のように体部下端が直線的なものと，下端近くでやや外彎するものがある。[4] これらの大平鉢は口縁部の形態に差異があり，次のように分類できる。ＡＯ01(Ⅰ類）は口縁端部が器壁外面に対して鈍角をなす。ＡＯ03（Ⅲ類）では内面の横ナデが強く，明瞭なくぼみが生じる。ＡＯ04・07（Ⅳ類）では横ナデがさらに強くなり口縁下端部に屈曲点を形成する。ＡＯ05（Ⅴ類）からは口縁部の幅が大きくなり下端が拡張する。この傾向はＡＣ06（Ⅵ類）で最大となる。各　の出土層位はⅠ類が第７層，II・Ⅲ類が第６層，Ⅳ～Ⅵ類が第６～第５層に集中する。このことから大平鉢はⅠからⅥ類の順に変化したと考える。また層位の年代からⅠ類が平安時代後期，II・Ⅲ類が鎌倉時代，Ⅳ～Ⅵ類が鎌倉時代末から室町時代中期頃にある。備前焼の鉢〔真壁68〕や常滑焼の甕の口縁[5]には年代と伴に肥厚化する傾向が認められ，本例も同様の傾向を示しているといえよう。(藤原)

**陶磁器**　緑釉陶器，灰釉陶器，[6] その他の国産陶磁器が出土した。

緑釉陶器　軟質の緑釉陶器と硬質の緑釉陶器　大別できる。埦と皿が出土　の大部分を占め，香炉が１点出土した。ＡＧ01・02は畿内製品と考える軟質の緑釉陶器である。ＡＧ01は胎土が淡白褐色で，釉調は淡白緑色を呈しややむらがある。切高台[7]をもつ９世紀の埦である。ＡＧ02は口縁部の外面に稜をもち外方へ反る皿である。ＡＧ03～10は硬質の緑釉陶器である。ＡＧ03は胎土が灰褐色を呈し，底部内面に線刻文様[8]を施す。蛇の目高台[9]をもった10世紀後半の埦である。ＡＧ04は胎土がやや白っぽく釉調は薄い白緑色を呈す。付け高台をもつ埦であり，10世紀であろう。ＡＧ05は切り高台をもつ埦で　る。ＡＧ07は暗灰色




**第６図**　大平鉢の口縁

の堅緻に焼成した胎土をもつ皿で，京都市右京区小塩窯産[10]と考える。なお同窯の製品としうる埦も出土している。ＡＧ08は精良な灰褐色の胎土で，底部内面に重ね焼きの痕跡を残す。畿内製品と推定する。ＡＧ10は香炉である。胎土は暗茶褐色を呈し，釉調はかなり濃い緑色であり，内面には釉をかけていない。そのほかに10世紀の畿内製品と考えうる埦が出土している。

灰釉陶器　猿投窯，美濃古窯，屋北古窯，三重県桑名七輪２号窯の製品が出土した。ＡＡ02・03・05・07は猿投窯産であり，同窯の製品が灰釉陶器の大多数を占める。ＡＡ02は胎土が茶色を帯びた灰白色であり，内外面に釉を塗る。10世紀後半の埦である。ＡＡ03は胎土が灰白色で器壁がやや厚い。底部外面に糸切り痕を残し，高台は少し矮小化している。12世紀に下る埦である。また内面にのみ丁寧に釉をかけた口縁部の破片があり，10世紀前半に遡る。そのほか折戸10号窯式と考えうる瓶（ＡＡ05)・９世紀の長　瓶と　壺，および12世紀の四耳壺と摺鉢（ＡＡ07）が出土した。

Ａ04は美濃古窯産の埦である。つけかけの手法[11]に　り内外面　釉　かけ，高台は低く，白瓷　～Ⅱの時期に相当する。ＡＡ06は三重県桑名七輪２号窯の　造と考えうる段皿　る。胎土は暗灰色を　する。段は内面を浅く削り，段皿の中では新しい11世紀の製品である。また屋北古窯の製品としては11世紀の埦と長頸瓶が　土した。

その他の国産陶磁器　山茶埦,[12]常滑焼，信楽焼，備前焼，古瀬戸，美濃焼[13]初期伊万里が出土した。山茶埦は常滑の製品が１点出土した。　台端部に糸切痕を残し,[14]12世紀のもであろう。

ＡＫ01～03は常滑焼の甕口縁部である。ＡＫ01は器壁が薄く，口縁端部をほぼ水平につまみ出し丸くおさめる。ＡＫ02は口縁端部をやや上方につまみ出す。ＡＫ03は口縁端部横ナデを施し面をつける。以上の口縁部の変化は，年代的なものであり，順に12世紀前半，12世紀後半，13世紀前半と考えることができる。その他の無釉の陶器としては室町時代初期の信楽焼と同中頃の備前焼摺鉢が出土した。

ＡＫ04～09は古瀬戸である。ＡＫ04は釉がやや酸化し，室町初期の笠松～椿２号窯式と考えることができる。ＡＫ05は浅鉢。ＡＫ06は平埦であり椿２号窯式にあたる。ＡＫ07は孫右衛門～７曲式の折口深皿である。ＡＫ09は瀬戸天目埦である。口縁部の段があまく，高台は底部の中心近くに付き15世紀後半の製作と考えうる。そのほかに深皿，片口，仏花瓶が出土したが，ほぼ鎌倉時代末から室　時代前期のものが多い。

安土桃山時代以降の施釉陶器としては志野の小皿と織部の皿が１点づつ出土した。磁器

は初期伊万里の埦と皿が出土した。志野は天正年間，織部は慶長年間，初期伊万里は江戸時代初期に位置づけることができる。

輸入陶磁器　青磁は龍泉　系と同安窯系に大別で　る。ＡＤ01～04が龍泉窯系の青磁である。ＡＤ01は底部内面に片切彫のぼたん文を施した埦である。見かけの釉色はやや黄色を帯びた薄緑色を呈する。南宋の製品である。ＡＤ02は器壁が厚く釉が高台の内側にまでかかる。元末か明に下る埦である。そのほかに龍泉窯系の埦としては体部外　に鎬葉文を施したものが出土した。鎬が明瞭で器壁が薄い南宋に遡るものと，鎬があまく下る時期のもの，鎬がなくなり胎土が粗悪になった明に下るものとがある。ＡＤ03は香炉，Ａ　04は皿である。ＡＤ05は同安窯系の皿である。体部外面に稜を有し胎土は黒っぽく，見かけの釉色は暗い青緑色を呈する。底部内面は無文であるが，同安窯系の製品に特徴的な電光状の文様を施すものもある。底部　面には窯道具の痕跡を残す。埦は体部内面に電光状文様，外面に放射状櫛描文を施すものが１点出土した。釉調は皿と同様である。皿の出土量が　い。

ＡＰ06～11は白磁の埦と皿である。ＡＰ06は口縁部を折り返して肥厚させ，外面にヘラりを施し器壁を薄くつくる。釉の色調は比較的鮮かな白色を呈し，北宋に遡る可能性がある。ＡＰ08も口　部を折り返すが，器壁がやや厚く，釉の見かけの色調は乳白色である。南宋以降に下る。ＡＰ09は口縁部とやや外反ぎみにつまみ端部を丸くおさめた埦である。器壁は薄い。ＡＰ10・11は埦の底部である。ＡＰ10は高台の内側を浅くつくり，ＡＰ11の高台は高く，明瞭な稜をもつ。

青白磁は景徳鎮の製品と考えうる埦，皿，梅瓶，合子が出土した。埦の内面には猫掻文と片切彫を組み合わせた文様を施す。皿は高台がなく底が広いものと，高台のあるものがある。梅瓶は外面に渦文を施し，伝松山城出土品に類例がある。[15] 合子は蓋の破片である。そのほかに口禿げ[16]の皿が小量出土した。底部まで薄い青緑色の釉がかかり，底はやや窪みぎみの平底。体部は外反しながら立上る。中国天目は立上りがあまく元に下るものが１点出土した。胎土は暗灰色である。

中国製品としては以上のほかに褐釉をはじめとする雑器と称する陶磁器類が小量出土した。陶磁器の分類・編年に関しては楢崎彰一氏から多くの御教示を頂いた。(上村)

**瓦　類**　軒丸瓦片27点，軒平瓦片19点で，大部分は小片である。また，緑釉丸瓦片１点，文字瓦５点，面戸瓦片１点も出土している。その他，平・丸瓦類　大部分が小片であり，すべて建築遺構に伴うものではない。また，瓦溜のような一括資料としての意味も

り気味の複弁８葉と撥状の間弁とを配す。内外区は二重の圏線によって分け，外区には各弁頂と弁間とに対応させて16個の珠文を置く。平安宮創立時の製品で，８世紀末～９世紀の実年代が与えられる。

ＡＴ０２は，やや狭い弁区に反りの強い単弁を配し，各弁頂に対応させて外区に珠文を置いた蓮花文軒丸瓦である。表面黒灰色・内部淡灰褐色を呈し，焼成やや堅緻。胎土中の砂粒は少ない。瓦当部裏は縦位の削りで調整。同文品は二条城前遺跡で出土しており，報告者は平安中期に比定している〔板東63―第２図15〕。

ＡＴ０３は，複弁を配した蓮花文軒丸瓦で，外区の珠文は弁頂と間弁とに対応して置く。焼質はＡＴ０１にやや似ている。瓦当外周上部は縦ナデで調整する。瓦笵が荒れており同文例の認定が困難である。

ＡＴ０４は，亀岡市篠町（旧丹波国）の王子瓦窯の製品である〔安井60〕。灰褐色を呈し　やや軟質。胎土は精良。今回の調査では，同種の焼質の軒丸瓦細片が別に１点出上している。丹波王子瓦窯系の軒丸瓦では，本例のように複弁４葉の間から別の複弁４葉が覗く特殊な複弁蓮花文を最古型式とし，弁の平担化とともに各複弁が分離あるいは結合し，単弁16（＋α）葉もしくは単弁８葉蓮花文へと変化する。中房は二段に突出する場合と２重圏を有する場合とがあり，１＋４の蓮子を置くのが普通である。現在のところ　丹波王子瓦窯系の製品は，最古型式の軒平瓦を藤原道長の法成寺創建に用いたことが判っており〔福山・大塚68〕本軒丸瓦の実年代もほぼ11世紀前葉頃に比定できる。

ＡＴ０５・０６は，播磨国内の瓦窯の製品と推定される。尊勝寺比定地内などから同立異笵例が出土している〔杉山・岡田61―44型式・45型式〕。ＡＴ０５は，複弁６葉蓮花文で中房には１＋６の蓮子を置き，ＡＴ０６は複弁８葉蓮花文で中房には１＋８の蓮子を置くものと類推される。明るい灰色を呈し，焼成堅緻。胎土は精良。瓦当外周・裏ともにナデ調整。12世紀。

ＡＴ０７は，播磨国内の瓦窯で生産された巴文軒丸瓦である。太い圏線で分けた外区には密に珠文を配す。焼質・調整法はＡＴ０５・０６に共通。瓦当面から丸瓦部凸面にかけて釉がかり，黒光りしている。巴文軒瓦の普及年代は京都では12世紀中葉以降で，本例の実年代もその頃であろう。

ＡＴ０８は，内区に単弁蓮花文，外区に珠文を置いている。表面黒灰色，内部淡灰褐色を呈し，軟質。胎土には砂粒を多く含む。同文例は知らないが，焼質は12世紀中葉以降の

中央宮衛系の瓦窯[17](1)の製品に共通する。

ＡＴ０９は，本例では小片で文様が不明確であるが，同笵例が法勝寺池汀址などから出土している〔六勝寺研究会75—図21の17〕。平面的な線画風の単弁10葉蓮花文軒丸瓦で外区に珠文を置く。淡灰褐色を呈し，軟質。胎土には砂粒を含む。瓦当外周下部および瓦当裏面の下部は横位のヘラ削り，他はナデで調整する。瓦当面は天地径に比して左右径の長い楕円形で，12世紀中葉の中央宮衛系瓦窯の製品と推定される。

ＡＴ10・11・12は，外区に珠文を密に配した巴文軒丸瓦である。焼質・調整法などは，12世紀後半の中央宮衛系瓦窯の製品に通有のものである。

ＡＴ13も小片であるが，類品が法勝寺比定地内や石清水八幡宮，建仁寺などから出土している〔西田24－図版第８(二)(四)，天沼25—第８版(五)，伊藤19—第19図(イ)〕。いずれも，外区に珠文を疎に配し，内区には複弁８葉蓮花文を置く。建仁寺例は中房に「仁」字を，法勝寺例の一点は「九」字を，他の例は「卍」字を置く。建仁寺創建に用いたと考えるならば13世紀前半に比定し得る。青灰色を呈し，焼成堅緻。胎土には石英等の小粒を多く含む。

ＡＴ14・15は三ツ巴文軒丸瓦で同笵の可能性が強い。外区には珠文24個を密に配置する。瓦当面には雲母・石英粒が付着しており，ハナレ砂を使用しているらしい。灰色を呈し，焼成堅緻。胎土中には細砂を多く含む。瓦当外周は横ナデ，瓦当裏は横位のヘラ削り，丸瓦部凸面は縦位のヘラ削り，凹面には指圧痕が認められる。ＡＴ30の軒平瓦と対をなす可能性が強い。時代はよく判らないが，鎌倉末～室町時代頃であろうか。

ＡＴ16は，二重画文軒平瓦の右端部分である。灰色を呈し，焼成やや堅緻。胎土中には細砂を多く含む。凹面は横ナデで調整。いわゆる奈良型式軒瓦のひとつ（難波宮6572系統）と考えられる〔伊藤—73〕が，平安京域外でこの種の瓦が出土したことは今後に問題を残す。

ＡＴ17・18は同笵であるが，ともに瓦当中央部分を残すのみである。ＡＴ17は淡赤褐色，ＡＴ18は表面黒灰色・内部淡灰褐色を呈し，ともにやや軟質。胎土には長石・赤色の石粒などを多く含む。顎部下端は２回の横位ヘラ削り，瓦当裏は横ナデで調整する。同文例の出土を聞かないが，焼質・製作技法はＡＴ20のような12世紀前半の中央宮衛系瓦窯の製品に共通する。

ＡＴ19は，唐草文軒平瓦の左端部分である。上下外区に珠文を密に配す。表面青灰色・内部淡灰褐色を呈し，焼成やや堅緻。胎土には長石・チャートなどの大きな砂粒を含む。顎部下端は２回の横位ヘラ削り，頸部には指圧痕が認められる。凹面には布目圧痕を残す。

同文例を知らないが，11世紀末から12世紀前半の中央宮衛系瓦窯の製品に類似する。

ＡＴ20は，左京区幡枝の栗栖野瓦窯の製品である〔西田・梅原34—図版第14の４〕。左ら右へ向けて流れる唐草文軒平瓦の右約⅔の部分に当る。ただし，瓦当面に比して瓦笵が大きく，全体の文様構成は不明確である。表面灰色・内部淡灰褐色を呈し，焼成はやや堅緻。胎土には石英粒などを含む。顎部下端は２回の横位ヘラ削り，頸部には縦ナデ・指圧痕を有す。凹面には比較的細かい布目圧痕を残す。同文例は，尊勝寺・円勝寺比定地内などから出土している〔杉山・岡田61—195型式〕。同文例において，瓦当部の成形技法にはいくつかの差異が認められる。基本的には，平瓦凸面の広端部に別粘土を貼りつけて瓦当部とするものと，平瓦の広端部を凸面がわに屈曲させて凹面がわに別粘土を補って瓦当部とするものの２種に大別できる。後者の技法は12世紀中葉に多く認められ　前者はそれに先行する。本例は粘土接合面が必ずしも明確でないが，どちらかと言えば前者の技法に近い。

ＡＴ21は　反転毎に花文を置く唐草文軒平瓦の一部であるが，小片のため全体の文様構成は不明である。表面黒灰色・内部淡灰褐色を呈し，軟質。胎土には，石英・長石粒を若干含む。瓦当上端および顎部下端は横位のヘラ削り，頸部は横ナデ，凹面には布目圧痕を残す。

ＡＴ22は，唐草文軒平瓦の中央部やや右寄りの破片である。赤褐色を呈し，軟質。丸味を帯びた小石まで含む粗雑な胎土である。瓦当部は平瓦の広端部を折り曲げて製作しており，顎部下端は縦位の縄叩きで整形。平瓦部凸面の縦位の縄叩きは瓦当裏まで及び，頸部は曲げに際して生じたシワを横ナデで調整している。同笵例は尊勝寺比定地内より出土しており〔杉山・岡田61—179型式〕，ＡＴ26・27などとともに中央宮衛系瓦窯の12世紀後半の製品と推定している。

ＡＴ23は，唐草文軒平瓦の小片で，同文例の認定が困難である。灰色を呈し，焼成堅緻。胎土には長石粒などを若干含む。瓦当裏は横ナデ調整。

ＡＴ24は，連巴文軒平瓦の右半部である。淡灰褐色を呈し，軟質。胎土には石英粒などを含む。中央宮衛系瓦窯の12世紀中葉の製品に類似する。

ＡＴ25は，幾可学文軒平瓦の右半部である。表面黒灰色・内部淡灰色を呈し，軟質。胎土には石英粒などを若干含む。顎部下端から瓦当裏にかけて横ナデ調整。中央宮衛系瓦窯の12世紀中葉の製品に類似する。同文例は六角堂比定地より出土している〔甲元・佐々木75—第３図４〕。

ＡＴ26・27は剣頭文軒平瓦の一部である。淡灰褐色を呈し　やや軟質。胎土には石英粒などを多く含む。平瓦の広端部を折り曲げて瓦当部を成形している。

ＡＴ28は，小型の剣頭文軒平瓦の左半部である。赤褐色を呈し　やや軟質。胎土には石英粒などを多く含む。顎部下端から凸面にかけては横ナデ．凹面の布目圧痕は細かい。

ＡＴ29は，Ｃ字上向の中心飾に対し．蕨手１葉を左右に反転させた唐草文軒平瓦の中央部である。瓦当面にハナレ砂の使用を認める。黒灰～青灰色を呈し　焼成堅緻。胎土には細砂を多く含む。時代はよく判らないが，鎌倉末頃の製品であろうか。

ＡＴ30は，うねりの少い唐草文軒平瓦の右端部である。表面灰色・内部青灰白色を呈し，焼成堅緻。胎土には細砂を多く含む。今回の調査で同笵品が別に２点出土している。鎌倉末～室町時代頃の製品であろうか。

ＡＴ31は，凸面に菊花状文を陰刻した面戸瓦の破片と推定される。ＡＴ29・30の軒平瓦に伴うものであろうか。

ＡＴ32は，丸瓦王線部の側面近くに針のような鋭利な工具で“大”字を刻んだ文字瓦である。凸面は横ナデ，端面および側面はヘラ削り，凹面は細かい布のしぼり目の圧痕を有す。1973年度の農学部構内調査においても同一箇所に同一書体の“大”字を書いた丸瓦片１点が出土している。

ＡＴ33・34・35は，平瓦の凸面に“大”字を並べて陽刻した文字瓦である。凸面は糸切痕を一部残し縦ナデで調整しているが，別にハナレ砂を使用してナデ調整をしない例もある。文字の押捺は調整後である。凹面は丁寧に調整し，布目圧痕は認められない。すべての個体において，凹面には凸面とは逆の“大”の字がかすかに陰刻されており，同種の文字瓦が窯入れ以前に重ねた状態にあったことが判る。ＡＴ32とともに，軒平瓦ＡＴ30に伴うものと推定される。

**そ の 他**　　石鍋，銭貨，鉄釘などが出土した

石　ＡＲ０１は断面三角形の鍔をもつ。内外面を丁寧に加工する。石材はレールゾライト。砥石として再利用されている。ＡＲ02は耳をもつ。耳の形態は縦長の直方体である。内面と口縁端面を丁寧に加工する。外面は上から順に横方向の粗い削りを施す。補修孔があり外面には煤が付着する。石材はウェールライト。本遺跡および病院遺跡から出土した石鍋の石材は一般に滑石と呼ばれるが岩石名としては蛇紋岩、橄欖岩と呼ぶものである。これら鉱物の組合わせによって次のように細分された。Serpntinite　(蛇紋岩)，Dunite　(ダン橄欖岩)，Hornblentite　(角閃)，Pyroxenite　(輝岩)，Metadiabase　(変輝

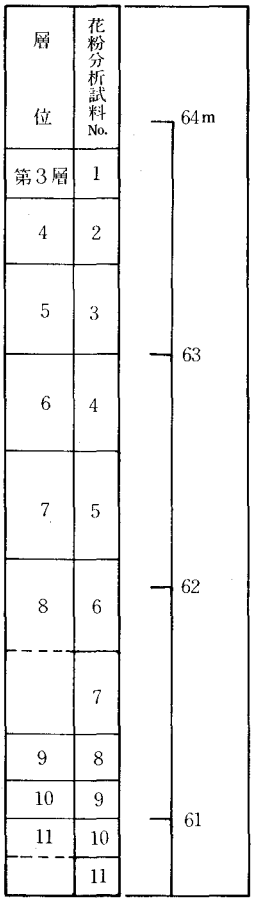
緑岩), Lherzolite (レールゾライト)。Mebsterite (ウエブステライト), Websterite(ウェールライト)。これらはすべて超塩基性岩体にみられるもので，本遺跡周辺では京都府大江山付近にこのような岩石がそろって産する。石鍋の製作地としては長崎県西彼杵半島の工房址が知られている〔下川73〕。また滑石は山口県や和歌山県からも産する。しかし、それらの地域は単独では今回出土した石材の組合せがそろわない。これらの石鍋が石材のそろう大江出周辺で製作されたか，複数の産地から運ばれたものであるかは今後検討する必要がある。

銭貨は開元通宝が１点Ｃ１区第５層上面から出土した。鉄釘がＣⅠ・ＣⅡ区上層から出土したが，建築遺構などに伴うものではなかった。なお石鍋の石材に関しては京都大学理学部講師中山勇氏の教示を得た。（宇野）

## 4　Ａ区北壁の花粉分析

はじめに　　京都大学農学部の新館建設に先立って行われた遺跡発掘調査において出さした遺物によって，堆積は近世から縄文時代に遡ることが明らかになった。そこで各時代の植生環境を花粉分析によって推定しようとした。すなわち，検出花粉の種類組成と量の多少を調べ，堆積時の植相ならびに植生、古気候を推定した。しかし今回の調査では，処理試料数と検出花粉数が僅かであったため，植生変遷はおおざっぱに推定するにとどまった。

試料　　深さ約４ｍ中に12層がみられるＡ区北壁から，第１層（表さ)。第２層（耕土）を除いた８層を選び，さらに層の厚い第８層と資料的に興味がある第11層は上・下に二分して，つごう11地点から資料を採集した。各層を垂直方向に５cmの厚さで分割し，その中間に位置する試料を花粉に用いた。花粉分析試料No.とそれが得られた層位との関係は図○の模式図の通りである。なを層位の詳細については前述の「層位」の頃を参照されたい。




分析方法　　試料約150ｇを次の順序で処理した。試料を水にとき、ふるいにて大型のゴミを除く⟶５％NaOH（24時間⟶177μのメッシュにて小型のゴミ除去⟶水洗（５～10回）⟶H-Cl：$HNO_3$：$H_2O$＝１：１：１の混酸を加熱⟶水洗（３回）⟶

→蒸発皿に移し植物質の鉱物質を分離⟶5％NaOH（24時間）⟶水洗（5回）⟶H-F処理⟶Acetolysis処理⟶水洗⟶封入（グリセリンジェリー）

固定は検出花粉が少なかったので，出現した全花粉について行い，またその数を数えた。

**結果及び考察**　に示すように，花粉は試料1，2，3，6，9，11から検出され，その他から検出されなかった。試料4の第6層黄砂より上の層は5世紀末以降の新しい堆積物であり，この3層からは花粉が検出されている。一方下の層においては交互に花粉が出現している。この理由は明らかではない。試料11及び9については花粉の他に植物繊維もよく保存されていることからすると，これらの試料は水成層のものであると考えられる。

次に種組成並びに量の多少についてみる。最下層試料11においては，検出花粉数が少く，量的には議論できないが，その構成種をみると，Betula，Carpinus，Pteocatya，Acer等の落葉広葉樹が出ており，当時の森林がこれらの落葉樹を含む森林であったことを思わせる。一方，下層（6～9）において花粉の多い種類は常緑ガシである。また試料6においてPodocarpusが出現している。これらは常緑照葉樹林の構成植物であり，特にPodocarpusは現在海岸沿いの暖地に生育している。Podocarpus花粉はヒプシサマール期には比良山地の頂上付近からも見っかっていることから，高度100～200m位まで分布を拡げていた可能性がある。（中堀：未発表資料（従って，北に川付近の山地にはPodocarpusを多く含んだ常緑照葉樹林が成立していたと考えられる。

この時期のPinusの比率は少く20％以下であったが，上層においては50％以上になる傾向がみられる。Pinusは高木層を形成する樹木の中では最もパイオニヤ的で，また土壌の瘠悪な所に生育し得る植物であるが，逆に土壌が豊かで，長年月にわたって破壊を受けない森林には入り込むことができない。従って，Pinusは人里近くで頻繁に人手が加えられる地域に多く生える。つまりPinus花粉の頻度が多いことは，森林に対する人為干渉が頻繁であることを示す。上層でPinusが多く下層で少いことは，5世紀末以降森林の林床を明るくし土壌を瘠悪化するような人為干渉が行なわれたと考えられ，縄文時代以前にはそういう形での森林への関わり方はされていなかったと考えられる。

最後に気候についてみると，試料（6～9）の頃は，現在よりも温暖な気候条件であったと思われる。最下層では，試料9の時期よりも冷温であった可能性がある。（中堀）

| 資料No. ＼ 属名 | Cryptomeria | Cupressauae | Abies | Pinus(D) | Podocarpus | Fagus | Quercus(D.) | Quercus(E.) | Betula | Corylus | Carpinus | Alnus | Pterocarya | Zelkora | Celtis | Acer | Aescurs | Viburnum | Ilex | Abelia | Acanthopanax type | | Gramineae | Carduoideae | Cichorioideae | Artemisia | Cavyophylauae | Thalictrum | Hypericum type | Typha | Periporate | | Lycopodium | Osmunda type | Monolete Spores | Others | 総計 | 花粉総計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 2 | 1 | 1 | 16 | | 1 | 1 | 1 | | | 2 | | | 1 | | | | 1 | | 1 | | | 2 | | 1 | 2 | 1 | | | | | | 4 | 6 | 30 | 3 | 77 | 34 |
| 2 | 1 | | | 5 | 1 | | | 1 | | | | 1 | | | | | | | | | | | 2 | 1 | 1 | | | 1 | | | | | 1 | 3 | 23 | | 41 | 14 |
| 3 | | | | 3 | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | 1 | | 5 | 3 | | | | | 1 | | | | | | | 1 | 15 | 14 |
| 4 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 5 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 6 | | 2 | | | 1 | 1 | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | 2 | | | | | 8 | 1 | 19 | 10 |
| 7 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 8 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 9 | 3 | 5 | | 14 | | 4 | 10 | 50 | 2 | 2 | 1 | | | | | | 1 | 2 | 3 | 13 | | | 14 | | | | 1 | | | 1 | 2 | | 1 | 1 | 11 | | 141 | 128 |
| 10 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 11 | 2 | 2 | | 4 | | | | 5 | 4 | | 1 | | 1 | | 1 | 1 | | | | | 2 | | | | | | | | | | | | 1 | | 1 | 3 | 28 | 24 |

表３　花粉分析結果（数字は各資料中の花粉伯数）

## 5　むすび

今回の調査は昭和48年から数次にわたって行なってきた農学部校舎新営工事に伴う最後の事前調査であった。縄文時代晩期末の土器を単純に含む土壙は，京都府南部で初めての発見である。昭和49年の調査で弥生時代前期の頸部に段装飾をもつ壺が出土したこととあわせて（中村74ａ）今後京都府南部における弥生文化の成立過程を解明するための重要な手掛りになるであろう。不定形ピット群の性格は決めにくいが，粘土そのものが扇状地上では非常にめずらしいものであり，粘土層がない前回の調査地域にはこの種の遺構が存在しなかったことから，井戸と対をなして粘土採堀場であったと推測している。したがって建物は東または北のやや離れた所にあったと考えている。Ｄ区出土の石と瓦が詰っている鎌倉時代から室町時代のピットによって，平安時代初頭から室町時代まで調査地周辺に瓦葺の建物があったことが証明された。16世紀以降調査地周辺は田畑と化したと考えられる。

出土遺物に関しては整理が半ばであるため概略を記すにとどめた。上層出土の遺物は層位をある程度細分して遺物を採集できた。細片の多い資料ではあるが，包含層が層位をなす遺跡の少ない平安京内と周縁の地においては，貴重な層位がわかる資料である。今後さらに整理を続け出土遺物の検討を行なうつもりである。下層出土遺物は前回の調査に比べて貧弱ではあるが，晩期の資料が増した点が評価されよう。北白川扇状地には縄文時代早

期から現代までの遺跡が存在するが，１世紀から７世紀までの遺跡が断絶していた。今回５世紀末の須恵器が出土し，その断絶は約500年間に縮少した。このように非常に長い間人々に利用された遺跡は少なく，１小地域における様々な生活の変化を研究できる点で，北白川扇状地上の農学部構内遺跡は貴重な存在である。遺跡調査の報告書は農学部遺跡の一連の調査とまとめて京都大学のしかるべき機関から出版されることを期待する。

## 註

(1) 京都市都市計画局発行の2500分の１の地図「田中」の西南端（108,000　　20,000）を（X＝2,000　　Y＝2,000）とする原点を仮定し，北と東とに数値が増加する京都大学構内用の座標である。

(2) この種の土器の口縁部文様帯はほとんど渦文と長方形区画文からなっている。渦文を施す口縁部は文様の形に規制され，半円状に上方に拡張したものが多い。この口縁部を主文様部と呼ぶことにする。

(3) 原則として口径が器高の５倍以上のものを皿，以下のものを坏とした。

(4) 外彎するもので後述のⅣ～Ⅵ類に属するものはない。

(5) 本書，第２章　３　「**陶磁器**」参照。

(6) 須恵器の技術的伝統をひきながら施釉を施すようになったものを灰釉陶器とする 。

(7) 窪み気味の平底に削り出した高台を切り高台と称する。

(8) 花鳥文が崩れたものと考えうる。

(9) 切り高台の内側を削り段をつけ，釉が蛇の目状を呈するもの。

(10) 表採品との比較により推定した。

(11) 釉薬の中に漬けて釉をかける手法。

(12) 灰釉陶器の系統をひきながら雑器化した一群の茶埦形の陶器。

(13) 美濃瀬戸をさす。

(14) 焼成時の融着を防ぐため。

(15) 東京国立博物館　1975年『日本出土の中国陶器』

(16) 焼成時の融着を防ぐため，口縁部の釉を掻き取った一群の磁器。

(17) 左京区幡枝の瓦窯を「中央官衙系瓦窯」と仮称する。

## 参考文献


天沼俊一　1925年『続家蔵瓦図録』。

伊藤玄三　1973年「平安宮跡出土の奈良型式瓦」『古代文化』第15巻２・３号

伊藤清造　1919年「京畿地方に於ける古瓦文様の研究(5)」『考古学雑誌』第10巻２号

梅原末治　1935年「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第16冊

円勝寺発掘調査団　1972年「円勝寺跡の発掘調査」『仏教芸術』84号

大阪府教育委員会　1971年『陶邑』『大阪府文化財調査抄報』第一輯

1976年『陶邑Ⅰ』『大阪府文化財調査報告書』第28輯

京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会　1975年『平安京関係発掘調査概報－京都市高速鉄道烏丸線内発掘調査－』

甲元真之・佐々木英夫　1975年「平安京六角堂址の発掘調査(上)」『華道』第37巻３号

佐原真　1960年『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第１部

下川達彌　1973年「滑石製石鍋考」『長崎県立美術博物館研究紀要』第２号

白石太一郎　1969年「いわゆる瓦器に関する二，三の問題－古代末～中世初頭における土器の生産と流通に関する考察－」『古代学研究』54号

杉山信三・岡田茂弘　1961年「尊勝寺発掘調査報告」『奈良国立文化財研究所学報』第10冊

田辺昭三　1966年『陶邑古窯址群Ⅰ』

1973年『湖西線関係遺跡調査報告書』

中村徹也　1974年ａ『京都大学農学部総合館北棟建設予定地埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅰ』

1974年ｂ『京都大学理学部ノートーバイオトロン実験装置室新営工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要』

奈良国立文化財研究所　1962年『平城宮発掘調査報告Ⅱ』

1974年『平城宮発掘調査報告Ⅵ』

西田直二郎　1924年「法勝寺遺址」『京都府史蹟勝地調査会報告』第６冊

西田直二郎・梅原末治　1934年『栗栖野瓦窯址調査報告』『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第15冊

橋本久和　1977年「中世日常雑器類の分析－高槻市における編年試案」『大阪文化誌』第

第２巻第３号
坂東善平　1963年「二条城前遺跡出土の瓦について」『古代文化』第10巻第２号
福山敏男・大塚ひろみ　1968年「法成寺の古瓦」『仏教芸術』68号
平安京調査会　1975年『平安京跡発掘調査報告－左京四条－坊－』。
間壁忠彦・間壁葭子　1968年「備前焼研究ノート(3)－備前焼窯址の分布とその性格－」『倉敷研究集報』第５号
安井良三　1960年「篠町Ａ号瓦窯址」『亀岡市史』上巻
吉田恵二　1974年「前川遺跡発掘調査」『平城京朱雀大路発掘調査報告』
六勝寺研究会　1975年「京都市動物園爬虫類館建設工事に伴う“法勝寺跡”発掘調査報告」『京都市埋蔵文化財年次報告　1974－II』